

藤田湘子の三十句

野本京選

令和八年一月一日（2026.01.01）

愛されずして沖遠く泳ぐなり

『途上』

27

枯山に鳥突きあたる夢の後

『狩人』

168

孔雀まで吹かれて来り春の暮

182

鯉老いて眞中を行く秋の暮

『春祭』

223

ふるさとの海は鳴る海蓬餅

『去來の花』

356

子規ほどの根気はあらず白團扇

404

戦争が過ぎ夙が過ぎにけり

445

なべて足り男子がなし年逝くも

454

家を出て家に歸りぬ春の暮

『前夜』

575

娘へ

椎の實が降るはればれと愛されよ

『神楽』

585

湯豆腐や死後に褒められようと思ふ

603

水母にもなりたく人も捨てがたく

『神楽』

609

ゆくゆくはわが名も消えて春の暮

613

闊歩して詩人にならうねこじやらし

631

梟が啼けば荒野へ還るわれ 天山の夕空も見ず鷹老いぬ 春の鹿幻を見て立ちにけり	6 3 2
雪の夜のしづかな檻の中にをり 時間からこぼれて冬のしじみ蝶	6 7 5
春の暮死んでから読む本探す 死者とまだ訣れてをらず白木槿	6 7 6
今を在る者が愛弟子冬木の芽 枯山へわが大声の行つたきり	6 8 4
虎落笛わがのどぶえを誘ふなり 虎落笛わがのどぶえを誘ふなり	6 8 1
麦穂波父と娘といふ構図 麦穂波父と娘といふ構図	6 9 5
鷹孤り夏夕ぐれの避雷針 鷹孤り夏夕ぐれの避雷針	7 0 5
六月六日、飯島晴子忌 六月六日、飯島晴子忌	7 0 6
螢火忌のいづこの闇に居給ふや 狐火の傳くならば彼岸まで	7 1 0
文藝に修羅無くなりぬみやこ鳥 木蓮の声なら判る氣もすなり	7 1 1
7 1 9	7 1 7